
短編集

冬空 白雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N5964U

【作者名】

冬空 白雪

【あらすじ】

いろいろな物語を創っていきます。

短いです。

最高の夜（前書き）

三題噺。

夏祭り ヒヨコ ティッシュ です。

最高の夜

今日は夏祭りがある。

「あの時を思い出すなあ」

小学生の時、僕は大好きな彼女と一緒に夏祭りに行くことになった。まさか、僕が彼女と行けるなんて思いもしなかったんだ――

「じゃんけんで負けた奴が好きな人に夏祭り誘おうことな。いくぞ、最初はグー、じゃんけん！ ぽん！」

5人でじゃんけんをして、僕だけパーを出し、負けた。

「おい！ お前の負けな。行つて来いよ」

「分かったよ……」

そして、大好きな彼女の所に行く羽目になった。

「あ、あの……今日の夜に夏祭りあるの知ってる？」

「うん、知ってるよ。でも、私は行くか分からない」

「そうなんだ……。じゃあ、ぼ、ぼ、僕と行かない？ 夏祭り？ きつと楽しいよ」

「ええ、うーん。どうしようかな？ 別に行つてもいいけど……」

「奢るよ！ 僕が奢るから、行こうよ」

「分かった。いいよ。じゃあ、8時に祭りの所でね」

彼女を誘うことができた。

夏祭りなんてものは、女の人と行くのは始めてだった。何をしたらいいか分からない。いつも野郎だけで行っていた。

夜の8時。

彼女が指定した時間に僕はちゃんと祭りの中にいた。服装は着物

ではなく、いつも通りの服装。Ｔシャツにジーパンだ。

木の下で待っている彼女が遅れて来た。

「ごめんね。遅れちゃった」

「いや、僕も来た所だから」

「あれ？ 着物じゃないんだ。私、着物着ちゃったよ。恥ずかしい」

「ご、ごめん。僕も着物着たら良かった。今からじゃ遅いか……」

「いいよ、大丈夫。それより屋台めぐりに行こう」

「うん」

彼 女の着物姿はともかわいく、とても綺麗で、最高だった。

「ねえ、あれすごいよ！ 私、初めてみた。ヒヨコすくいだって！
持ち帰る人がいるんだって話だね。ちょっとやってみようよ」
「あ、うん。やってみよう。楽しいそう」

ヒヨコを網ですくうゲーム。金魚すくいみたいなものだ。

動き回るヒヨコはなかなか網ですくいにくく、網に乗せても破れてしまう。

「オヤジ！ これ無理な話じゃないの！？ ホントにできるの？」

「おうよ！ ウソはつかねえぜ。ちゃんと取れる人には取れるんでい」

「む、難しい。ヒヨコが元気だ」

「新鮮な証拠だぜ」

「私は取るよ。ヒヨコをもらうからね」

「おう、やってみな」

彼女は30回目でヒヨコを獲得した。彼女は喜び、跳びはねて僕に抱きついてきた。抱きつかれた勢いで倒れてしまい、頭を地面に打ってしまった。そして、僕は意識を失った。

「あああ、大丈夫！？ ごめんね」

「んんん……」

意識を取り戻し、目が覚める。

「ごめんね。痛かった？ 頭から血が出てきたからティッシュで塞いだから」

「えええ、ティッシュで！？ 頭にひつつくよ。あああ、固まって取れない」

「ごめんね、血を止めないといけないと思って。混乱してたの」

「ああ、うん。ありがとう」

「お詫びにヒヨコあげるよ」

「あ、ありがとう」

それから話をして、告白することもなく帰ってしまった。

それ以降、彼女に告白することもなく。いつも片思いで過ごすだけで、卒業してしまった。

あの時のヒヨコは鶏になって、今も僕の家にいる。

アザラシ、旅に出る（前書き）

月 アザラシ ゆで卵 です。

アザラシ、旅に出る

ここは月の世界。

空はいつも暗い。

月にはウサギが住んでいる。

と、言われているが——実は、そうじゃない。

実はアザラシが住んでいた。

「ゆで卵が好きなんよ。ボク、新幹線でゆで卵6つも食べてるからね。ゆで卵大好き」

アナログとテレビ画面の右端に映っているテレビから、顔がゆで卵みたいなじじいがゆで卵のことを大好きと言っているじじいがゆで卵を宣伝している。

テレビを観ていたアザラシは思った。このゆで卵というやつを食べてみたいと。

「食べてみたいのん。よし、決めたのん」

家を出て、ゆで卵を探しに行く旅をすることに。

「所でゆで卵ってどこにあるんだのん？ オラ、友達いないから訊けないのん。なんか、寂しくなってきたのん」

歩いていると気づいた。

「アザラシしか住んだいないんだから、卵ないんじゃないのん？

まあ、ダメもとで探すのん」

商店街、月の食達。

ここには食のお店がいっぱい並んでいる。いい匂いが自然に鼻を直撃する。お腹が空いてきた。

「ああ、いい匂いだのん。何か食べたいけど……ゆで卵のために我慢するのん」

「そこのお兄さん！ かつこいいお兄さん！ 月一イケメンのお兄さん！ 焼きそばどうだい？ おいしいよ！」

「え？ オラ？ イケメンだったんだのん？ そうか！ オラ、イケメンなんだのん」

「そうだよ！ イケメンだよ。焼きそば食べな」

「しょうがないのん。イケメンと言われたら、断れないのん」

「いい食べっぷりだね。もうひとついかが？」

「おいしいのん」

アザラシは焼きそばを食べ続けた。

そして、お腹がいっぱいになり。家に帰ってった。

「何か忘れているような気がするのん？ なんだったっけ？ 思い出せないのん」

テレビをつける。そこにはじじいが、

「ゆで卵おいしいねん！ ホンマにおいしいねん！」

思い出した。

全てを。

あの時の思いを。

懂れていた気持ち。

好奇心。

全てを取り戻した。

が、

「しまったのん!! 焼きそば食べちゃったのん!!」

クリスマスの夜に（前書き）

クリスマス オヤジ プール

クリスマスの夜に

子供たちが一番好きな行事。

それは、クリスマス。

日本のクリスマスは、最近、カップルで過ごす“性なる夜”と言われているが、カップルのものではなく、キリストでもなく、本来は子供たちの為のもの。

子供たちの為に1年で一番仕事をする俺は、サンタクロース日本支部、ナンバー7。

子供泣かせと言われている。

「待っててくれよ。オジサンがプレゼントしてやるからな」

最近煙突がなく、どこから入ればいいか困る。仕方ないので、いつも玄関から入っている。

——カチャ、カチャ、カチャ。カチン。

「ふー、これでオツケーだ」

玄関のカギを開け、気配を消して入る。

「お邪魔します」

——プーン、プーン、プーン。

『侵入者を発見しました！ 侵入者を発見しました！』

「な、なんだ!？」

『排除します！ 排除します！』

——ガタッ。

オヤジが立っている所に穴が開く。足場をなくしたオヤジは落ちていき、滑っていく。

出口が見えた。

そこは地下。しかも、下にはプールがある。

——バシャン。

全身水浸しに。

「冷たい」

オヤジは諦めず、子供たちが待つ部屋へ。

——ピチャ、ピチャ、ピチャ、ピチャ。

水を滴られながら、部屋の中を歩く。

子供はベットですやすや寝ていた。子供の顔を覗きこむ。その時、水が滴り、子供が起きてしまった。

「誰？ 何してるの？ 何で勝手に部屋にいるの……………はっ、うわあああああああああん」

子供が泣いてしまった。

さすが、子供泣かせの二つ名に負けていない。

「おかあああああああああああああああん」

その後、ナンバー7は警察にお世話になったという。

犬のお姉さん

これといって楽しい遊具がない公園、だだっ広い公園。

そこに毎日、犬を散歩させているお姉さんがいた。男と遊んでいると思わせる化粧や髪色、服装なのだが僕には魅力的に見えた。

お姉さんのことが好になってしまった。

公園で遊んでいる時に初めて見たあの瞬間、あの笑顔で虜になった。これまで女性との関わりがなかった僕には十分な理由だ。

今日は勇気を出して、ベンチに座っているお姉さんに話しかける。
「お姉さんいつも犬を散歩させてるね」

「そうだね、散歩させないと犬もストレスを解消できないから。君は、いつも見かけるね。何してるの？」

ワンワンワン！——犬が吠える。

「こら！ ダメでしょ、咆えたら。ごめんね」

「うん、慣れてるから大丈夫。別に何もしてないけど……強いて言えば、お姉さんに会えるのが楽しみになってるかな」

「ええ、そうなの？　ありがとう」

「えへへへ」

自分で言っておいて恥ずかしくなってしまった。

「こんなに朝早く公園にいたら、お家の人心配しないの？」

「大丈夫だよ」

「本当に？」

心配することもないし、心配させることもない。なぜなら——

「だって僕は、死んでるから」

ストーカー

ストーカー！。

それは、人を追いまわす悪質で陰気な犯罪。

「ストーカーは怖いな」

「怖い。気持ち悪いし最悪」

帰り道に友達的女子と話をしていた。その女子が最近ストーカーに悩まされていると相談を受けた。

「何かあったら俺に言えばいい。また相談に乗るよ」

「ありがとう」

道を別れて家路につく。

俺はそのまま部屋に直行する。

「ただいま」

机の引き出しを開けると、さっきまで俺と話していた女子の写真がたくさん散乱している。

そう——俺が、そのストーカー！。

手にとり、写真を眺める。

「かわいいなあ。はあはあ」

写真にキスしたりしてみる。

「ちゅー」

胸が張り裂けそうだ。彼女を俺のモノにしたいという思いが溢れ出す。

「今日はいっぱい話すことができたなあ。嬉しい、幸せだ」

会いたい、見たい、会いたい、見たい、という感情が泉のように湧きだす。

今夜も実行することに決めた。

22時。彼女が塾から帰る時間。

俺は帽子をかぶり、用事もないのに携帯をポチポチいじりながら

スタンバイしていた。

塾から友達と一緒に彼女が出てきた。
「ツチ、独りじゃないのか。まあいい、どうせ最後は独りになるんだから」

数キロ歩いて彼女は友達と別々に別れた。

ここからが本番だ。

俺は気づかれないようにつけていく。

途中、異変に気づいた。彼女は頻繁にキョロキョロしている。怯えている。

「気配を感じられたか？」

しかし、俺がいる方向に向いていない。

急に走り出した。すると、俺のちよつと前にいた男も走り出した。俺と同じストーカーがいたのだ。

「彼女のストーカーは一人でいいんだ」

俺はそいつを追いかけて捕まえた。

そして、彼女を呼び止め、彼女に話す。

「夜に買い物してたら見かけて声を掛けようとしたんだけど、急に走り出すから何かと思えばストーカーがいるからビックリしたよ」
ストーカー男が暴れる。息が苦しいのだろう。

この男に知られている可能性があるので、手で口を塞いでいるせいだ。

「あ、ありがとう。捕まえてくれたんだね」

「警察呼ぼうか？」

「うん」

こうして彼女のストーカーは俺だけになった。

数週間後。

捕まえたおかげか知らないが、彼女は”彼女”になっていた。

彼女ができた俺は、ストーカーを止め。

幸せに、彼女の横にいる。

約束

僕は、いつも約束をしては破っていた。その代償か、約束すると言っても信じてもらえなくなってしまうた。でも一人だけ何だかなだ言って信じてくれる人がいた。

僕が好意を寄せている人だ。

「でも……そんな僕でもこれだけは守るから！ 絶対に君を待つて
る。この木の下で待つてるから！ 絶対に！」

これが好きな子に向けた最後の言葉だった。

彼女が町から引越をしてしまうからと、最後に僕を祭りに誘ってくれた。彼氏彼女の関係ではないのに、何故か仲良くしてくれた。

「明日、祭りがあるんだって。一緒に行かない？」

「いいよ、行こう。約束する」

「ホントに！？ あ、でも、いつも約束するって言って破るからなあ……」

「確かに。でも……そんな僕でもこれだけは守るから！ 絶対に君を待つてる。この木の下で待つてるから！ 絶対に！」

「うん、分かった。じゃあ夜の7時に。明日ね」

指きりをして、彼女はそう言うのと帰って行った。

翌日。

僕は早めに家を出て、木の下で彼女を待つていた。これだけは破つたら後悔してしまう、そう思った。

約束の時間になっても彼女は現れない。

「まあ、いつも破っているし。人のこと言えないから……」

何時間待つても現れない。

「嘘をつかれたのかな……いつも約束破ってたし。好きだったんだけどなあ」

祭りは終わってしまった。

大人になったても、約束を果たそうと僕は待つ。祭りがなくても、夜7時に木の下で——毎日。

仕事も融通が効く自営業にした。

好きだから——あの時の気持ちを伝えようと。

好きだから——今までの行いを謝ろうと。

好きだから——信じたかった。

彼女は現れないかもしれないけど約束は守ろうと——それを死ぬまで貫いた。

約束2

いつも約束を破る彼が気になっていた。最初、この気持ちは好きとかそういう感情ではなくて、何で守れない約束をするのか気になっただけだった。でも目で追うようになったら好きになっただけでいい。約束は守らないし、別にイケメンでもない。良い所はないはずなのに、これが母性愛というものなんだろうか。

ある日、家に帰ると親にここを離れると告げられる。どうせ離れるなら告白しないほうがいいと思った。時間が経てば好きじゃなくなるだろうし、忘れるかもしれない。もっと彼よりもっと良い人が出てくるかもしれない。

「でも言いたい。この気持ちを知ってほしい」
告白すると決めた。

近く、祭りがある。誘って、その時に告白しよう。

その日がやってきた。

公園に呼び出し、木の下で待っていると彼が遅れて歩いてきた。

彼は「やあ」といって言葉を掛けてくれる。

「明日、祭りがあるんだって。一緒に行かない？」

「いいよ、行こう。約束する」

「ホントに！？ あ、でも、いつも約束するって言って破るからなあ……」

「確かに。でも……そんな僕でもこれだけは守るから！ 絶対に君を待ってる。この木の下で待ってるから！ 絶対に！」

「うん、分かった。じゃあ夜の7時に。明日ね」

指きりをして、私は先に家へ帰って行った。

親は私を探していたようで、理由を訊くと早めに引越すことになり明日になったと、私の行動は虚しく壊れた。

「そんな……」

反抗するはけにはいかず素直に従うしかなかった。

約束の日――私はこの町を離れた。

彼が約束を守ってくれているか確認することもできない。

ただこれだけは言える。

約束を破ってごめんなさい。

タヌキのポンスケ

森の奥深くにタヌキの里がありました。毎日どんちゃん騒ぎをしては幸せに生きていました。しかし、そんな暮らしがあるにも関わらず一人のタヌキは思いました。

「外の世界はどうなっているんだろう」

どんちゃん騒いでいるタヌキ達を遠くで眺めながら木の枝に座っています。

「見てみたいな、外の世界を」

けしてここが嫌なわけではない、むしろ好きだ。だが、知りたいという好奇心か、見たいという欲求が日に日に増していった。

今まで仲間のタヌキや先代のタヌキ達に外の世界は行くなと言われてきた、恐ろしい所だと。

「この目で見てみたいとは思わないのか？ オイラは見てみたい。知りたい」

横にいる仲間のタヌキ、ポン太郎に言う。

「何言ってるんだよ。危ないに決まってる、帰ってこれなくなった者もいるんだぞ」

「そうだけどさ……。もっと楽しいことあるかもしれないんだぞ？」

「ああ、でも外の世界を見に行つて殺された仲間もいる。歴史を学べよ、過ちを犯さないために歴史があるんだ」

「歴史は本当にあつていいのか分からないじゃないか。一緒に外を見に行かないか？」

「俺は行かない。そんなことしなくてもここには幸せがある」

「お前は幸せ者だな」

そう言つとタヌキは、木を下りて走り出す。

森をぬけたその先には見たこともないいろんなモノがありました。

黒いモノが動いていたり、歴史で聞いたことのある人という生き物もいたり、大きな物体が何個も並んでいたり。未知の世界がタヌキを歓迎しました。

「これが外の世界か」

山から離れて中を目指します。

「うわぁ」

見るものすべてが新しい。森の中にいた頃も楽しいといえれば楽しいのだが、今は血がぞっと流れていてワクワクしている。

「あっ」

タヌキのボンスケ（後書き）

つづく。

タヌキのボンスケ2

人間と目があつた。

人間はじつとこちらを見ている。何をしようとしているのかは分からない。ただ、何か嫌な予感がした。

「タヌキだあ、本物のタヌキだ」

そう言つて、近づいてくるではないか。

「やばい……逃げなきゃ」

人間はおかしな物を取りだし、タヌキに向けてくる。

——カシャ——！！

「うわあ！」

何をされたのか検討もつかない、でも危害はないようだ。

余計なことをされる前に逃げる。人間から離れ、大きい壁の中へ。そこには大きな木があり、おいしそうな木の実がなっていた。お腹も空いていたので食べようと木に登る。

「おいしいな。これは何て言うモノなんだろう」

「コラ！ 何をやつとる」

「キュン」

体に痛みが走った。人間に石を投げられ、あたったのだ。

「痛い……逃げなきゃ……」

「待て！ タヌキ」

人間から逃げたものの傷が痛んで動けなくなった。

「つつ……死ぬのかな。ははは、意識が……だんだん……な」

道端で動けなくなっていたタヌキの近くに女性の人間が通りかかった。

「大変、助けなきゃ」

タヌキを抱えだかれ走つてどこかへ連れていかれた。

意識を取り戻して目を開けると、白い服を着た人間がいた。タヌ

キは狭い籠の中に入れられている。

「生きてた」

「ん？ 目が覚めたらしいね。女性のお姉さんが連れてこなかったら死んでいたね。感謝するんだよ」

白い服を着ている人間が言っていた人間は籠の中を覗いている。

「私、この子飼います」

「そうかい。飼うのはいいが最後まで責任持って育てるんだよ」

「はい」

まさかの展開にタヌキはどうしていいか分からなかった。

「……」

「君は今からポンスケだよ。よろしくね」

それからポンスケはお姉さんと暮らし、お姉さんに看とられ幸せに暮らしましたとさ——めでたしめでたし。

桃太郎―鬼編―（前書き）

オリジナルではないです。
桃太郎です。

桃太郎―鬼編―

それは突然現れた。後ろに犬、猿、キジ、を連れて、今まで平和に暮らしてきた日常を壊す。村は、血に染まっていく。

「お前らは何だ！」

一人の赤鬼がそれに訊く。

「俺は桃太郎だ。鬼どもを退治してくれる、覚悟しろ」

桃太郎という人間は赤鬼より、数倍も身長が低い。

「何！？」

キジが赤鬼に向かって飛んできた。赤鬼の頭の周りを飛びながら、くちばしで突いてくる。赤鬼は視界を遮られ動けないでいる隙に、犬が足を噛みついてくる。

「ぐわあ、痛つ。逃げろ！ 逃げろ、お前達」

後ろにいた子供の鬼や村の女性達に告げる。しかし、桃太郎は許さなかった。

「逃がすな！ 逃がせば村はまた襲われる。猿、キジ、子どもはお前達に任せる。俺と犬は後で行く」

猿とキジを先に行かせ、子供を襲わせる。

「やめろ！ やめろおおお！」

赤鬼が叫ぶ。

「そうはさせるか。消えろ」

猿が桃太郎のいたところまで吹き飛ばされる。

青鬼が猿を殴り飛ばしたのだ。

「赤鬼！ ここは任せる。子ども達はやらせない」

「青鬼、頼んだ。俺は桃太郎達を――」

「邪魔するな、糞が」

桃太郎がいたはずの所に姿がなく、青鬼の目の前にいた。

「ぐっ」

一息を肺から出す暇を与える前に青鬼は桃太郎に斬られてやられ

てしまった。

「猿！ お前にきびだんごをやっただろ。二度とヘマするなよ」

猿は立ち上がり、子供たちのもとへ行く。

「青鬼……………何で！ 何で！？ お前たちは俺達をこんな目に遭わす！」

「お前らは人間を苦しめただろ。その報いだ」

「お前ら人間だって動物食べるだろ。俺達も生きていくためにしたまでだ、同じだろ」

「人間にケンカを売ったお前らが悪い。俺のおじいさんとおばあさんを悲しませた、お前らがな」

「そんな……………分かった、もう人間には危害をくわえない。だから、命だけは……………子ども達と女だけは助けてくれ」

「知るか、滅べ」

犬が足の肉を噛みちぎる。

「ぐあああああああ」

「やめろ！ お前達は僕が相手だ」

子どもの鬼が桃太郎の後ろに立っていて、赤鬼を助けようとしている。

「来るな！ 来るな！ 逃げろ！！」

「ガキか。何だ？ こいつを助けたいのか？」

「父ちゃんには指一本触れさせない。俺がお前らを倒してやる！」

「俺がやるまでもない。犬、あいつを噛み殺せ」

命令された犬は赤鬼から離れ、子供を標的にして走り出す。

「やめろおおおお」

犬の足は速く、時速を落とさないまま子供の首を噛みちぎる。

「桃太郎おおおおおお！！」

赤鬼は犬に噛みちぎられた足で走り出し、桃太郎を殴りかかる。

が、確かにそこにいた桃太郎の姿はなく、赤鬼の握り拳は虚しく何もあたった感触はなかった。

「どこだどこにいる」

「ここだ」

桃太郎は赤鬼の右肩に立っていた。

そして、桃太郎は刀をかまえ――

「終わりだ」

首を斬り落とした。

その後、桃太郎と犬、猿、キジ達は村を鬼を滅ぼし、村に帰った桃太郎は祝福されたとき――。

浦島太郎―その後―（前書き）

勝手に妄想したお話です。

浦島太郎―その後―

絶対に開けてはならないと言われていた宝箱を、浦島太郎は開けてしまった。箱の中から白い煙がもくもくと出てきました。

「何も見えない、何だ!？」

煙は消えて視界が回復します。箱の中身を見ると何もないではありませんか。

「何だっただ？ ん!？」

良く見ると箱を持っている手がしわしわでまるで老人の手。

「これはどういうことだ。何が起きた!？」

箱を置いて顔に触れて確かめます。

「しわしわだ……。顔も手も足も全てしわしわになってしまった。

これが宝箱だと!？ ふざけるな！ 俺はこれから女と結婚や子供も欲しかったんだぞ！ じじいになってしまったら結婚どころか女とも付き合えないではないか。金持ちじゃないんだ、無理な話だ。許さない、許さない!!」

浦島太郎は激怒しました。こんな箱を渡した、招いた、現れた、竜宮城の奴等が憎いと。

「憎い、憎い、憎い。未来を奪った奴らが憎い」

浦島太郎は金持ちではありません。金さえ持っていれば金の力で女は出来ます。しかし、金もなく、地位もなく、外見もじじいといれば相手にしてくれる人はいません。

「じじいとか勘弁してください。嫌がらせですか？」

「そんな……」

声を掛けてもこの調子です。

唯一可能性があるのは、ばばあです。でも、浦島太郎はばばあには興味がありません。

「行かなきゃよかった……カメを助けなければよかった……」

それから浦島太郎は、復讐するかのように死ぬまで魚を乱獲した

そ
う
だ。

ウサギとカメ―カメの復讐―（前書き）

勝手に妄想です。

ウサギとカメ―カメの復讐―

ウサギとカメが走りで競争しました。もちろん、みなウサギが勝つと思っていた。だが、ウサギは余裕からか、勝負の途中で寝てしまい、負けてしまいました。

「そんな……バカな……俺が負けるなんて」

「やあ、ウサギ君。僕の勝ちだね。あんなに余裕かましていたのにね、残念だね」

「つく……」

それから、ウサギの周りには仲間がどんどん消えていきました。

カメの所に行ったのです。

「あれ？ こんな所にウサギ君がいるじゃないか、気づかなかったよ。いつも僕をバカにしていた時と比べてオーラが全然ないね。いつもの自慢はどうしたんだい？」

「別に自慢なんて……ないよ」

「そうかい。そうそう、あれから僕モテモテなんだよ。ウサギ君のおかげだね。ウサコちゃんにも付き合ってよって言われちゃってさ」

「まさか……そんな」

遠くから誰かが来ました。

「もうカメ君たら、私を置いてかないでよ。私達付き合っているんだからさ」

「ああ、ごめんごめん。ほら元彼のウサギ君だよ」

「えゝ知らないよ、そんな人。ほらほら映画館行こうよ、始まつちやうよ」

「そう言うことなんで……じゃあね、ウサギ君」

「……」

取り戻したい。あの時から狂った日常はもう嫌だ。

「俺が間違っていたんだ。こんなに苦しいものなんだ。痛い、とても痛い……」

心が痛いのだ。

雨ときどき晴

太陽がさんさんと輝いて街中が照れされているなか、私はクラブ活動をしています。運動場の端っこは、私が所属している陸上部の場所。そこで、私は棒に苦戦していた。

「跳べないよ……棒にあたっちゃう。やっぱり才能ないのかも」

才能がない——運動という運動が私にはできない。何も躓く要素もない所で走っていてこけるほどだ。

——何故私が陸上部に入ったのか知りたいですか？

それは好きな人がいるからです。そうです、動機が綺麗に不純しありません。純度百パーセントです。ジューズなら健康なのが……。

「そんなことないよ。初めてだしそんなこと当たり前」

同じクラスの友達が励ましてくれます。おう、優しさで涙が出そうです。

「ありがとう、お母さん」

抱きつきます。

「誰がお母さんだ!」

冗談が言える仲です。なので、もちろん私が陸上部に入部したかも知っています。

「高跳び出来る人は神だね、神」

渾身のツツコミを待っていたのにスルーされました。寂しいです。

「ほら、もう一回するよ」

「うん」

距離をとり、助走をつけます。アドバイスをもらったように、ちよつと大きめに外に走り、背面跳びします。

「うりゃああああああ」

——カンッ。

「痛い……痛いよ。心も痛いよ。雨が降ってるよ、傘いるよ」

勢いをつけて、声も勢いよく跳べそうな人のような感じで出したのに、頭にあたりました。

「声出すことは良いことだけど、声だけでは跳べないよ。もっと跳ぶ前に足を綺麗に合わせないと」

確かにそうだ。跳ぶ前に歩数を合わせようとしてスーピーが落ちていた。

——綺麗に合わせないといけないのか、良いことを聞いた。

「もう一回やるよ」

「分かった。付き合うよ」

もう今は跳ぶことにしか頭にありません。跳んでから好きな人には近づきます。

同じように助走をして、跳ぶ前の歩幅を合わせていきます。

「跳べ！」

身体がふわりと宙に浮きます。まるで飛んでいるかのようにです。いや、跳べているのです。

「やったああああ」

初めて跳べました。オリンピックで金メダル撮れた時のように嬉しいです。

「やった、やったよ！ オリンピック行けちゃうよ」

「無理だ、ボケ！」

ツッコミがさく裂しました。

「ここからがスタートだよ」

そうです。やっと雨が止んだんです、晴れて好きな人の姿が遠くに見えてきました。これから私は自信を持って好きな人を話すことができるスタート位置に居るのです。

頑張ります。

「もう一回跳ぶよ。見ててね」

——カン。

「アウツ！」

棒が頭にあたりました。痛いです。跳べたのはまぐれだったらし

いです。

まだ雨ときどき晴らしい。でもいつか、晴ときどき雨にしたいです。

「もう一回いくよー」

クリスマスはいつも

ゆーきやこんこんあられやこんこん。

冬のある時期になるといつも胸がズキズキする。ドキドキではなく、ズキズキ。学校の教室では、クリスマスの予定で盛り上がっている。

「友達と遊ぶんだ」「彼氏と一緒に過ごすー」「俺はいくぜ、決めるぜ」「童貞卒業してやる」「性なる夜を！」「彼女の家にお泊まりなんだ」

やめてくれ、と思う。本当に止めてくれと心から願う。だって——
「どうせ俺は、親といつも通りだよ……」

俺に彼女なんてものはいないし、友達とも過ごすということもない。もう解るだろ？ 俺が言うまでもないが、一応言っておく。そう、俺はぼっちなんだ。

耳を塞ぎたい。いまだけ声がない世界にいたい。

ある男子と目が合った。こちらに向かってくるではないか。

「来るな、来るな、来るな。お願い、やめてくれ……」

願いも届かず、そいつは俺の横に立ち止まった。チラッと見てみる。

「やあ、俺に何か用かな？」

「ああ、今日予定ある？ 数人でカラオケ行くんだけど空きが出来てさ。人数が合わないから来ないかなと思って」

「え……」

空きだけど、俺に声を掛けてくれた。俺にも青春が来たのかもしれない。

「どうかな？ 来る？」

「あつ——」

『うん』と返事をしようとしたが、よく考えたらカラオケとか行つたことなんてなかった。それに、きゃーきゃーするのは苦手なので

たぶん耐えられない。

「ごめん、今日は予定あるんだ」

「あつ、そうなの？　じゃあまた今度な」

そう言つと、男子は違う男子のほうへ歩いて行つた。

「はあー」

チャンスを潰してしまった。あれだけ願っていたことがせつかく俺の元にきたのに。

学校を終え、重い足を動かしてなんとか家に帰宅する。

「ただいま……」

「おかえり」

母さんの声が迎えてくれた。いつまでもクリスマスを家で過ごしている俺に何も言わないでいてくれる母さんには感謝している。

「ケーキ買ってるからね」

「うん」

卑弥呼さんはわがまま

もう数カ月も雨が降っておらぬ。これでは作物も育たない。こうなると、あの方にお願ひするしかないのだが、あまりしたくないのでございます。しかし、この役は私しかいないため他の者に任せることはできない。

仕方なく、あの方がいる場所へ。

「ああ、いましたか。お願ひがありましてやってきました、どうか聞いて下さいませ」

そのお方は、横に寝転がって漫画を読んでいた。

「嫌じゃ、めんどい。お前がなんとかせえ」

「そういう訳にはいきませぬ。これは民の命にかかわる問題、そして卑弥呼様にも関わるのでございます」

漫画には目を逸らさないでいる。

「何だ、申して見よ」

「は、ここ数カ月雨が降っておりませぬ。卑弥呼様のお力で雨をお呼びになつてはございませぬかと」

「ああ、それか。やぱりめんどくさいから無理じゃ」

「それでは卑弥呼様にも命の危険がございますぞ」

「ちょうどダイエットしてるのでう、大丈夫じゃ。むしろ食欲が出てきても食べ物が無いのならどうしようもないからな。その方がいいだろ」

「え？ いや、それは……」

「ぬ？ なんじゃ？ 私が太つてもいいというのか。それとも、お前なんか太つとけよ豚野郎とな？」

「いえ、そんなことは一言もいつておりませぬ。民の命が掛つております故、何卒お力を」

「しょうがないのう。運動がてらしてやってもいいぞ。だが、お前は一生妻を貰えないことにするからな」

「ええええ、ちょっとそれはあまりにもです！ 天秤にかけると言

うんですか！ そんなこと……」

「嘘じゃ。お前は私の嫁だかな」

「ごめんさない」

「え？」

「え？」

ゲーム

朝起きて、コンビニに飲み物とお菓子を買いに行った。帰り道に道の端っこに猫が甘い声で鳴いていた。お腹でも空いているのかと思ひ、先程買ったお菓子を猫に少しやる。少し手前に置く、戸惑いながら猫は近くに来てお菓子を食べる。満足したのか、猫はどこかへ行ってしまった。

俺も満足して、家に帰る途中に車に轢かれた。

朝起きて、コンビニに飲み物とお菓子を買いに行った。帰り道に道の端っこに猫が甘い声で鳴いていた。お腹でも空いているのかと思ひ、先程買ったお菓子を猫に少しやる。少し手前に置く、戸惑いながら猫は近くに来てお菓子を食べる。満足したのか、猫はどこかへ行ってしまった。

俺も満足して、家に帰る途中に知らない男に刺された。

朝起きて、コンビニに飲み物とお菓子を買いに行った。帰り道に道の端っこに猫が甘い声で鳴いていた。お腹でも空いているのかと思ひ、先程買ったお菓子を猫に少しやる。少し手前に置く、戸惑いながら猫は近くに来てお菓子を食べる。満足したのか、猫はどこかへ行ってしまった。

俺も満足して、家に帰る途中に階段で足を滑らせた。

「こっちゃん、御飯よー」

下から母さんの声が聞こえてきた。どうやらご飯の時間のようだ。僕はゲームを止める。そして、ご飯を食べに一階に下りた。

雪が降る頃

空から白いのが落ちてきた。冷たくて、手についたそれは直ぐに体温で溶けてしまう。ひんやりしていて気持ちがいい。

「わーい、雪だ。食べよう」

私は上を向き、口を開ける。

「ダメ！ 雪食べちゃだめなんだよ」

友達が私の口を塞ぐ。その友達の手を私は除ける。振り返り、言
つてやる。

「おいしいじゃん」

「おいしくないよ！ ほら、帰るよ」
「ぶー」

唇を振動させ息を吐く。これをするとう唇がかゆくなる、私だけか
もしれないけど豆知識だ。

景色に面白みが出てきて楽しい。冬は好きだ。寒さも、切なさも
私は好き。

「楽しいー」

「どうしたの！？」

「楽しいんだよ」

世界は変わるんだ（前書き）

あくまでフィクションです。
架空です。

世界は変わるんだ

今日は同窓会。久しぶりに高校のときの奴らと会える。非常に楽しみである、忘れることができない記憶になるほど印象があるからだ。

とあるホテルに集まっている。スーツをビシツときめて、香水もほのかに香るようにつける。

準備ができ、トイレを出て会場に。

扉を開けると人がいて、誰が誰だか分からない。会場内に進むとシャンパンが何かの酒が置いてあったので喉を潤す。

「えー!? あの貴士君? すーごーい、変わったね! 私覚えてる?」

後ろから声を掛けられた。そこには見たことがある顔がいた。今日のここに来たのは、この女と会うためだ。

「もちろん——」

忘れるわけがない——こいつにイジメられていたんだからな。

「すーごーい。左腕につけている時計とかブランド物でしょ? お金持ちだね」

「ああ、これ? うん、自分のご褒美で買ったんだ」

「それに痩せてイケメンになってるね。高校の時はアレだったけど——いじめていたことを忘れているのか? こいつ……」

「そうかな? まあ、ちよつと痩せたのは確かだけど」

「痩せたし、整形だった。お金があればイケメンにもなれる。」

「ここは人がいっぱいいるから、ちよつとどこかで二人で話さない?」

「ああ、ごめんよ。ブスには興味ないんだ。俺が君と抜け出すだって? 笑わせないでくれよ。ブスのくせして面白い冗談だね」

「な、なによ……」

「ブスに話しかけるほど俺は暇じゃないんだ。君みたいなブス、俺

に何か価値をもたらせてくれるのか？ ブスは黙ってるよ、ブス」

「す、ぐすん……なによ。私が何したっていうの、ブスなんて酷い」

「覚えてないの？ 俺は君にいじめられていたんだよ？ 君みたいなブスにね。ブスはブスらしく大人しくしとけよ、ブス」

女は泣いて出ていった。

俺は、復讐を終えてスッキリし、酒を飲みほして帰った。

そう、金があればなんだってできる。

イケメンにもなれるんだ。世界は金で変わる。

ダウト（前書き）

なんとなく。

ダウト

「……」
「……」

……。――

本当は文字を書かないで括弧部分だけで書きたかったんですが……。

「200文字以上じゃないと載せねえよ、バカ」と言われたので、ただの文字数を稼ぐために適当に思いついた言葉を書いています。もう一回言います。

「200文字以上じゃないと載せねえよ、バカ」と言われたからです。

200文字も書かないと載せれないのです。載せたいのに。

「これ――」

「ダウト――!」

「まだ言っていないよ!」

君は独りじゃないよ

ジジー。

ジジジジー。

「ただいまー」

靴を脱ぎ、絞めつけから足を解放する。

「おかえり」

部屋着に着替える。

「いやー、今日も疲れた」

スーツを掛けて、リビングへ。

「今日もお疲れさま」

冷蔵庫を開ける。

「キンキンに冷えたビールだよね」

ソファーに座る。

「そうだね。おいしいよね、ビール。やっぱり冷えてないとね」

「そうそう、おつまみも出そうかな」

おつまみを取りに行く。

「ありがとう。おつまみは欲しいよね」

「ああー、仕事しんどいな。私、浮いてるもん。仕事止めようかな」

「そんなことないよ。大丈夫」

「でも止めても行く所ないしなー。せめて独りを脱出したら続けられるかもね」

「大丈夫、君は独りじゃないよ」

「さて明日も早いし、化粧だけ落として寝よ」

ジジー。

ジジジ！。

「おやすみ。僕も寝るよ」

一台の車がエンジンをかけて、ライトを点けて走り出す。

あなたの外にも車が止まっていますか？

もしかするとそれは、あなたのことを盗聴している人が乗っているのかもしれませんが。

クローン

物心がついた時から、ずっと我慢していた——我慢していたけれど言わなければならぬ。

「お母さん言わなければならぬことがあります。ずっと南奈として生きてきた、でも私は南奈じゃない……あなたが知っている南奈さんじゃない」

「何言ってるの？ あなたは南奈よ」
「……」

深い深い奥底に、私と同じ顔、同じ背丈、同じ性別の人と目の前にいる母親と南奈さん仲良く喋っている記憶がある。記憶の中にある時と母親はずいぶん違う。今は、よぼよぼのおばあさんだ。

「私は……」

「南奈は林檎好きだったわね。食べる？」

確かに、私は林檎が好きだ。母親は林檎をとりにもリビングへ。

「違う……違う。私は私です、南奈さんじゃない」

「あなたは南奈よ、南奈なの！！ 南奈なんだから」

「違う！ 私は南奈だけど、南奈じゃない。私は私！！ 身体は同じだけど心は、魂は違う！」

「あなたは南奈のクローン。あなたは南奈！」

「南奈さんは死んだ！ 死んだんだよ！ 死んだ人間は生まれ変わるけど、そのまま同じ姿で生き還らせることなんてできない。死んだんだよ！」

「違う！ 違う！」

「違わない！ 見て、私を見て！！ 私は南奈さんじゃない！」

「わああああああ」

「南奈だけど南奈さんじゃないんだよ」

母親は泣き崩れた。

これからは南奈さんじゃなくて南奈として生きる。

「うつつやっとなるのかな？」

森で二人の男が道なく道を歩いている。クマが出来てきても不思議じゃないくらいに森だ。そこである物を見つけたらしい。

「これ何かな？ 見たことないんだけど」

「知らない、初めて」

不気味な音が鳴る。

——ぎゅうううううううう、ごろおおおおおおおお。

「お腹空いたな」

「ああ、お腹空いた。これ食べてみるか？」

「でも知らないもの食べたら、危くないか？」

「まあ、そうだけど。見たことないものを発見したんだ。食べたら、初めて食べた人になれるんじゃないか？」

「歴史に名を残せるかもしれないってことか？」

「そうだ、大発見だ」

「マジか！」

「ああ、マジだ」

「じゃあ、食べるか？」

「ああ」

二人は迷ったあげく、森に生えていた傘みたいなキノコを食べることにした。

しかし、二人で同時に食べようとした刹那に一人の男がもう一人の男の分を奪い取って食べてしまいました。

「なんだよ！？ 盗るなよ」

「俺が歴史に名を残すんだ」

男は独り占めして食べてしまいました。その数十秒後、男はもがき始めました。

「うゝ、うつつうつつあああああああああ」

「おい！ どうしたんだ」

男はそのまま動かなくなりました。食べたものは毒があったようです。もう一人は、このことをみなの方に伝えました。それから、このキノコを食べた者はいません。

「うんことウン」

「ウンコさん？」

「そう言うあなたはうんこさん？」

「そうだよ」

「俺もそうだよ」

「何かさ……ウンコってかっこいいよね」

「ひらがなのうんこは何か弱っちいよね。カタカナのウンコは強く
て、かっこいいって言うか……そんな感じ？」

「まあ、確かに。うんこよりはウンコのほうがかっこいいのかも…

…。でもウンコって犬のうんこって感じだよな」

「うん、まあ、俺も思ってた」

「そう考えると、うんこのほうが良いのかもね。人間のうんこみた
いでさ」

「そうかもな」

サラリーマンは風俗嬢と寝ていた

チヨンチヨンチヨン。女性が体を触れてくる、しかも全裸で。

『ああ、やめて。ダメ……ああああ、もう、もう——』

「ああああああああ」

『もう——』という所で目が覚めた。起きあがり、見渡すと見えない部屋。

「何か豪華というか、まるでラブホテルのような……ラブホテル？どこからどう見てもビジネスホテルではない。スイートかもしれないが、そんな金は持っていないし、泊まるうとも思わない。

「マジかよ……アレ？何か視界にいるんだけど……どうしよう、どうしよう。見ていい？見てもいいよね、見ちゃうよ？」

せーの。

「誰!？」

俺の横に誰か寝ている。恐る恐る掛け布団をどけると、そこには女性が全裸で寝ていた。

「ああああああああ」

布団を元に戻す。

「俺のバカ、俺のバカ。何やってんだよ、そんなにプレイボーイじゃないだろ」

声が大き過ぎたのか、女性がもそもぞ動いた。起きてしまった。

「ふああああ。あつ、おはようございます。飲み物とがありますか？」

「あつ……う、うん、あると思う」

「すみませんが取ってきてくれませんか？お願いします」

「お願いされました……」

ベッドからおりて、飲み物がある冷蔵庫へ。開けて、二人分を取る。キンキンに冷えた飲み物は、俺の動揺を冷静にする。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

全裸とか気にしない。

喉越し最高。少しの間だけ心が落ち着き、何も心配なくていい
と思える。

「ところであなたは誰ですか？」

「え？ 私ですか？ 私は風俗嬢ですけど」

何言っているんですか——って、顔で言うてくる。

「私の知り合いに風俗嬢はいないです」

「あなたは私のお客様ですけど」

「ですよ……」

そんな感じはしていた。

「覚えてないんです……何で私は風俗嬢さんとホテルなんか？」

「キャバクラで言ったら、アフターみたいな感じですか」

「そうですか、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ」

サラリーマンは風俗嬢と寝ていた（後書き）

つづく。

サラリーマンは風俗嬢と寝ていた2

そこらへんに脱ぎちらかっていたスーツを拾い、着る。着替えている間に考えていたが、どうしても思い出せない。風俗嬢のことを疑っているわけではない。ただ記憶がないことは気持ち悪くて、イライラする。

「俺、昨日何かしました？」

タバコを一本吸ってから振り返り、後ろにいる風俗嬢に訊く。

「本当に覚えていないんですか？ あなたは——」

「ちよつと待つてください、深呼吸しますので……すーすーすーはー。もう、大丈夫です」

風俗嬢が言う前に言葉を遮る。いざ知ろつとすると脈が上がってしまい、ドキドキする。一旦、気持ちを落ち着かせる。

「いいですか？ じゃあ、言います。『本番がしたい』とおっしゃったので、『仕事外ならいいですよ。でもお金貰います』と言いましたら、『おっけー、お金払うよ！』と元気よく言って今に至ります」

「何かあるのかと思ったら、ただの変態だったのか、俺は！」

「5万円です。ありがとうございます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5964u/>

短編集

2011年9月19日03時23分発行